

小説 大学院生長嶋遥 遊び理論の冒険（1）
——ヒューム、カントの自由観とホイジンガの遊び理論——

小 原 一 馬

宇都宮大学教育学部紀要
第61号 第1部 別刷
平成23年（2011）3月

Adventures in play theory (Novel) (1)
– Hume and Kant's concepts of freedom and
Huizinga's play theory

KOHARA Kazuma

小説 大学院生長嶋遙 遊び理論の冒険 (1)

——ヒューム、カントの自由観とホイジンガの遊び理論——

小原 一馬

「うそっ、指導教官、森下に決めちゃったのー!?!」

ゆかりが大声をあげると、大学のカフェテリアで昼食をとっている学生たちの視線がいつせいに私たちに集まった。院生の余裕からか、ゆかりは周囲を別に気にする風もなく続ける。

「はるかサン。あなたねえ、ただでさえ、理学部卒業して社会科教育の院なんて無謀なのに、そのうえあの森下あ? はあ……。私にひとこと相談してくれたら、ぜったいたい、別の先生にしとけって言ったのに、よりよってなぜ森下チョイス。ありえん」とゆかりはぶつぶつ言いながら、大盛りのカツカレーのカツをフォークとナイフでぎくぎく切り分けていった。私はミートスパをフォークでぐるぐるまわしながら、そんなゆかりの態度に、ちよつと一言相談しておけばよかつたかなあと思いつつ答えた。

「えー、だって小学校の先生になるなら、理科だけじゃなくて、この機会にいろいろ勉強しておきたいじゃない? 社会学なら何でも好きなことがやれそうな感じだったし、森下先生にもメールで相談したんだけど、問題ないみたいだったし……」

「でもさあ、知ってた?」と、ゆかりは手をとめ、ぐっとテーブルに身を乗り出して言った。「森下ゼミって去年も今年も希望者ゼロだよ? いや、今年は大学院にあんたが入るけどさあ。学部ゼミなんてほとんど

ないも同然で、当然、ゼミの卒業生もなしだから、この前の卒業式にも森下こなかつたって、社会科の子、言ってたよ。ありえなくない? 彼女が先輩から聞いた話だと、森下が新任でやってきたときには、社会学結構人気あつたのに、毎年希望者がなぜかどんどん減っていつて、もうここんとこずつと森下ゼミって誰もいなくなつたって」

ふーん、そうなんだと私は思ったが、まあ人は人だしとも思い、スバゲティーを口に運んでいった。このカフェテリアの午後一時からの日替わりスバゲティーはいつもきちんとアルデンテで茹で上がってきて、今のところハズレがない。学食としてはたいしたものだ。ゆかりに勧められ一度たのんでみてから、ここでの私の定番メニューになっている。

「どうしてかわかる?」と訊いて、ゆかりはカツを一口食べるとすつと立ち上がり、カフェテリアのすみにおいてあるソースのビンを持ってきてとぶとぶとかけ、さらにカレーにも加えていった。それって塩分とり過ぎじゃない、と思いつつ、

「もしかしてセクハラ?」と聞いてみた。

確かにセクハラは困るけど、大学院の入学試験の面接の雰囲気だとそんな感じはしなかった。むしろ冷たくてクールな感じ。

それに対し、ゆかりは「そういえば、セクハラ噂がある先生は何人

「かいたな……」と、恐ろしいことをさりと口にした。彼女の情報源の広さからいえば、そういう噂も当然ひっかかってはくるのだろう。

「……そうね、幸い森下にセクハラ系の噂はないけれど、とにかく厳しいらしいよ。この前の卒論発表会でも、学生泣かせちゃったらしいしね。自分のゼミ生でもないのに、ちよつとおかしいんじゃないの？」と、鼻息まで荒くなる。

「そりゃ、すごいね」とゆかりにあわせつつ、（そういうゆかりも、自分の専攻でもないのに、よくそこまでご存知で……）と心の中でつつこむ。

「必修の授業でも不可続出で、あの先生のせいで留年した学生も結構いるって……。だからずいぶんうらまれてるみたいだよ」

「ふむ」と私は、スパゲッティを続けて口に放り込み、相槌をうつ。

「それにしてもあの先生に認めてもらわないと修論審査だつて通んないんだよ。だから絶対やめといたほうがいいって」

ゆかりは結論はでたねとばかり、ぐつと水を一口飲んだ。やつぱりソースはかけすぎだったのかもしれない。

「うーん、そうかなあ」と私は抵抗してみる。

「はるかサンは外部からだし、まだこれから変更も可能かもしれない。一緒にいっていつてあげるから、教務に相談してみたら？」

「ありがとう。ちよつと考えるみるね。ところでさあ……」

とゆかりの心配げな表情をよそに、私は軽く微笑んで話題を変えた。

ゆかりは中学からの親友で高校も一緒だった。大学は別だったが、また大学院で一緒になった。というか、大学の四年生にもなって、今さら小学校の先生になりたいと言い出した私に、この大学院の教職免許取得プログラムを教えてくださいましたのは彼女だ。幸い高校の教職はとっていた

から、この大学院で追加の単位をとれば、今からでも小学校の先生になれるのだという。それで、せっかくの機会に、学部の延長上での理科教育ではなく、これまでずっと気になってきた遊びについて考えてみたいと思つた。教育学部で遊びについて研究するのがどの専攻なのかよくわからなかつたので、もといた大学で、何人かの先生に相談してみたところ、「K大だったら、森下先生がいるわよ。彼の下で勉強したらいいんじゃないかな。遊びそのものが専門というわけではないけれど、きつとしっかり指導してくれると思うわよ」と勧めてくれる先生がいたのだ。四年生のときに新任でやってきて、友達に付き合つてなんとなくとつてみた他専攻のゼミを一年間受けただけの関係だったが、指導教官以上にあこがれを感じていた。その立野先生の言うことだったので、勧められるがままに森下先生の所属する社会科教育専攻の入試を受け、森下先生の専門の社会学ゼミに入ることにしたのだ。いちおう森下先生の著書も読もうとはしてみたが、難しくてよく分からず、ただ頁を繰るだけで終わってしまった。でもまだ社会学について何にも知らないのだから、そういうものだろうと思つていた。

なのに、ゆかりはこの反応である。

確かに彼女の言う通りなら、その心配ももつともではあるし、ゆかりは大事な友人だ。多少おせっかいなところがなくもないとはいえ、アネゴ肌の頼りがいのある存在で友達も多く、情報通だ。高校時代だつて、もし彼女が私の心の壁をむりやりぶち壊して、周囲に溶け込めるようにしてくれなかつたとしたら、ひとりぼつんと不思議ちゃんになつてしまつていただろう。（今だって、彼女に言わせれば十分不思議ちゃんなのだろう）。ちなみに、彼女は音楽科で声楽をやっている。音楽の先生の募集は少ないらしく、なかば就職浪人で大学院にきているクチだ。

彼女の友人たちの多くは、(私の数少ない友達も同様だが) 大体卒業して社会人になってしまっているとはいえ、まだ大学院に残っていたり、留年している子もちらほらいる。この学校のことは、確かに彼女の言うことを聞いておいたほうが良い気もするのだが……。うーん、でも今さらゼミを変えるのもきつと難しいよなあ……。

私たちは、それから私がとらなきゃいけない授業について確認し、(小學校の先生になるには、必ずとらなきゃいけない単位が山ほどある)、選べるものについては、彼女のおすそめをまずチェックしていった。ゆかりはその後、音楽科の友達と練習の約束があるということで、ひとまず解散。一人になった私は、彼女の言うことを確かめるというわけでもないが、思いつきで森下先生のところに挨拶に行ってみることにした。

*

(森下先生の部屋って、G棟の五階って書いてあるけど、G棟っていったいどこよ?)

キャンパス内で二度も場所を聞いた挙句、やっとキャンパスのすみのほうにぼつんと孤立して立っている建物に、「G棟」と書いてあることを発見した。どうやらここの最上階らしい。

エレベーターを降り、西日の差し込む廊下を歩いていくと、壁際には廃棄処分を待っているような、ほこりくさいソファがおかれている。教官部屋がならぶ南側を探しながら歩いていくと、一番奥に「森下研究室」という札を見つけた。扉の上にあるガラス窓から、中の光は見えない。先生は留守のようだが、いちおうノックしてみる。

「森下先生、先生のゼミでお世話になります、大学院一年の長嶋です」
中から返事はない。やはり留守のようだ。あきらめて、扉の前に伝言

のメモだけ残して帰ろうとかばんからごそごそとメモ用紙を探していると、中から声が出た。

「鍵はあいてるから、入ってきなさい」

*

室内は薄暗く、床から天井近くまでつまれた書類やら本やらでごったがえして、足の踏み場もない。タバコの臭いもある。扉を開けたところで当惑して立ちすくんでいると、「どういう用事?」とたずねられ、「新しくゼミに入った長嶋です」と答えた。すると先生は黒い椅子から立ち上がり、書類の山をかきわけつつ空いた空間を探しながらやってきた。

黒い髪には軽くウェーブがかかり、銀縁のメガネに神経質そうな細い顔だけはシュールベルトの肖像画を思わせる。フレンチなスタイルの黒のブルゾンに黒のジーンズというとりあわせは、この年代の男性としてはおしゃれという部類に入れてよいかもしくない。先生は「汚いところで、悪いね」というと、椅子とテーブルの上の本を取り除き、二人が対面で座れる空間をなんとかつくってくれた。

「いえ、大丈夫です」とはいつたものの、居心地がよいというにはまだまだ遠い。前の大学ではかの先生の部屋にも入ったことはあるが、ここまでのカオス状態はこれまで見たことがなかった。

「入学試験のときにお会いしましたね」と先生。

「はい。あのー、ここ座っていいですか」と私は立ったままたずねた。

「どうぞ」と先生が言い、私はさっきまで本が積まれていた事務用の椅子に座った。先生は自分の椅子に座ると、静かに話をはじめた。

「あのときの話だと、学部時代にニホンザルの群れの研究をされていて、大学院では、子どもの遊びについて研究したいと言うことでしたね」

「はい、そのとおりです」

「面接の際には、うまく理解できなかったけれど、サルの研究と遊びの研究には何か関係があるのかな？」

「サルも遊ぶんですが、それが印象深かったということ以上にはちょっと……」

「じゃあ、なんで遊びなんだっけ」

「前の大学で、子どもと一緒に遊ぶボランティアに参加していたんですが、私が子どもだった頃の印象と比べて、子どもが自分たちでなかなか遊ばなくなったような印象があったんです。でも、大人として、子どもが自分たちで遊べるようにするにはどうしたらいいのか、よくわからないくて」

「うん、そうだった。で、そのとき僕は、遊びについてなんて専門でもないし、指導できないよっていったつもりだったんだけど。やっぱり社会学にしたんですね」

その問いについては私も事前にどう答えるか準備していた。

「確かにそのときは、子どもの遊びについて考えたいなら、教育心理学のゼミがいいんじゃないかと言われたんですが、私は子どもたちがどうして、自分たちだけで遊ばなくなったのか、遊びを通じて子どもたちの主体性について考えたくて、だとするときつと社会の問題だから社会学のほうが近いのではないかと思っただんです」と、すらすらと答えられた。

「まあ、確かにそうかもしれない。心理学だと、そういう時代の変化みたいなことは考えないだろうしね。でも私は遊びについて何か研究しているわけでもないから、直接そのことについて指導することはできませんよ。あなたは社会学についてはほとんど知らないですよね」

「はい、前の大学の共通科目で社会学入門をとったくらいです」

「それなら、いちおう基礎はできてるのかもしれない。でも念のため、社会学概論の授業は出てみてください。それで、ゼミでは遊びについて一緒に勉強するような感じでやっていくことにしましょうか」

「はい、わかりました」と答えたものの、一緒に勉強するというのはちょっと意外だった。社会学の基礎や、調査などの具体的な方法は教えてくれるが、遊びについては勝手にやれと言われるのかと思っていただけらだ。

「あなたがこの研究室に入るというから、遊びに関する理論について少し調べてみました。ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』という本が古典ということになっているみたいです。遊びと主体性の関係について考えたいということなら、まずはその本から一緒に読んでいくのがいいでしょう。本は図書館にあるし、ネットで注文したらすぐ手に入るでしょう。ゼミは来週からですから、それまでに一章だけでも読んでみてください。ほかに質問はありますか」

「いえ、まだ今のところは。あのー、レジメは準備してきたほうがいいでしょうか？」

「そうですね、一応作ってきてもらいましょうか」

「はい、わかりました」

「じゃあ、いいかな」と言って、先生は立ち上がり、ふたたび書類の山をかきわけて、コンピューターの前に戻っていった。

なんだ、ゆかりはああ言ってたけど、結構親切そうない先生じゃないか、とうっかり私は思ってしまったのだが、後からそれは半分正しく、半分間違っていることに気づくのだった。

1 ホイジンガ 『ホモ・ルーデンス』

1-1 遊びと機能

一週間後、約束の時間に研究室をノックすると、先生は一〇分待ってくれと言う。私は院生控え室に戻り、今日からやるテキストとレジメを見返してみた。

『ホモ・ルーデンス』は、近代的な遊び論の原点となったホイジンガの画期的な著作（らしい）。ホイジンガはオランダの歴史学者で、『ホモ・ルーデンス』は第一次大戦と第二次大戦の戦間中に書かれた。

一〇分たつて、研究室に戻ると、「お待ちせしましたね」と言つて、森下先生が書類の山の向こうから姿をあらわした。

「あ、あの、これが準備したレジメです。こんな感じで良かったでしょうか？」私は先生が来る前にもう一度確認していたレジメをおずおずと差し出した。

「いやあ、まあレジメは何でもいいよ。どうせレジメどおりには進まないし」先生は胸ポケットからボールペンを取り出し、レジメにざっと目を通した。

「じゃあ早速だけど、はじめてみて」視線をレジメに落としましたまま、先生は言った。

「はい。今回読んできたのは『ホモ・ルーデンス』です。先生に指示されたのは第一章でしたが、一応全部読んできました」私がそんなふうに言うのと、

「それは熱心ですね。では次回からもっとページ数を増やしましょうか」と先生は真顔で言う。

「あ、いえ、それはちよつと……」と私は思わず自己防衛に走るが、先生は本気ではなかったようだ。

*

「でははじめます。まず、本のタイトルですが」と私は話をはじめた。「ホモ・ルーデンス」は、遊ぶ人を意味しています」

するといきなり先生は「それは正確ではありませんね」とわって入った。（うわ、どこでくるか）と私は少々たじろぐ。

「ホモという言葉が、分類学上の学名から来ているのは知っていますか」「はい。私たち人類が、学名でホモ・サピエンスと言われていることくらいは」いちおう大学では生物学が専攻だったので、さすがにそのくらいは知っている。

「確かにホモというのは、もともとラテン語で人という意味でしたが、ホモ・サピエンスという時のホモというのは、あくまで学名としてのヒト属のことで、日本語で言ういわゆる人という意味とは違いますよね」「はい」

「現生人類をホモ・サピエンスと呼んだのは、それまでのヒト属の中でその知能によって他と区別される存在だ、というような意味合いがあった。そこには、知こそが、われわれ人類のアイデンティティだって言う意味合いがこめられているわけです。ホモ・ルーデンスという言葉についても同じことが言えるのではないですか？」

「つまり、ホモ・ルーデンスというホイジンガの造語は、単に知能が高いというだけではなく、遊ぶということこそが、私たち人類を人類たらしめているものだ、という主張がこめられている、ということでしょうか」

「そのとおりです」

「でも人類と人ってどう違うんですか？ 私たち人類っていうなら、それって結局日本語で言う人ということと同じようにも思いますけど」と

私は言った。

「確かにそうかもしれませんが、でも『遊ぶ人』って言ったなら、遊ばない人もいることが大前提の言い方でしょう？ でもホイジンガからすれば遊ばないものも人ではないわけだ」

「では、先生ならどう訳されますか？」私はつい挑戦的になってこんなふうになぜか詰まらせた。

「ホモ・ルーデンスはホモ・ルーデンスだとしか言えませぬ」と先生。「だってホイジンガはオランダ語ではなくて、わざわざ学名と同じラテン語を用いようとしたんだし、学名をラテン語で示すというルール自体は日本語でも共通だから……。それで、ホイジンガのホモ・ルーデンスがどうしましたか？」

「ええ、そうでした。いきなりタイトルの説明でつままるとは思いませんでしたから、と思いつつ、私は次のように続けた。

「ホイジンガはこの『ホモ・ルーデンス』で、まず、ホイジンガ以前の遊び論は、遊びの本質を捉えていないとして批判します。先行研究を批判して、自分の理論をアピールするという王道のスタイルです」私は先生の目を見据えた。

「彼の批判はこうです。自分以前の遊び論は、遊びがどう他のものに役に立つかという機能から説明するものばかりだった。しかしそれは、人がなぜ遊ぶのかという問いに答えていないと」

「つまり、遊びの機能は、その本質ではないということなんです」先生は微笑みながら、そう答えた。ゆかりの話どおりなら、きつとこんなふうな学生と議論めいたものをするのは久しぶりだったはずだ。意外に楽しくなってきたのかもしれない。私もうれしくなって、調子に乗り、得意な生物学の話をはじめた。

「そうです。機能でものごとや現象の存在理由を説明するというのは、あの時代に流行した考え方でした。たとえばダーウィンに先行したラムルクの用不用論ってありますよね」

「説明していただけますか？」

「キリンの首はなぜあんなに長いのか、ということをラムルクは考えました」いえ、実際彼がキリンについて考えたかどうかは知りませんが、教科書とかでは大抵キリンが例に挙がるもので、と私は言い訳しつつ、ノートにキリンの絵を描きはじめ、

「そして、古いタイプのキリンたちの首はもともと短かったんだろう、と」そう言っ、首の短いキリンを二匹ほど描いた。

「だけれど、高い木の枝を食べようとして首を長く伸ばそうと頑張っているうちに、だんだん首が長くなっていったキリンがいたのだろうと彼は考えたんです」……きつと。

「たとえばバスケットボールやバレーボールの練習をしながら、上に飛び上がることを繰り返しているうちにだんだん背が高くなるのと同じように」そう言っ、私はひよつと、バスケのシュートの真似をした。先生が笑う。

「用不用というのは、何かの能力を用いるかどうかということなんです」

「はい」

「この場合は首を空に向けて伸ばすということですか」と先生がたずねる。

「首の伸びた古いタイプのオスキリンが、やっぱり同じように首の伸びたメスキリンと結婚して子どもができる、今度ははじめから少し首の長い子どもが生まれるのだろうとラムルクは考えたんです」……きつと。

そして私は、はじめから首の長い子どものキリンを描いた。

「そしてさらにその子どもがまた首を伸ばそうとして努力し、長くなった首を次の世代に伝えていく。そんなふうには、よく用いられる役に立つ形質が世代を超えてだんだん積み重なっていった、それでキリンの首はあんなふうになくなっていった。そう、ラマルクは考えたんです」と私は言った。

「でも、ラマルクの用不用論は、ダーウインの進化論が出てきて否定されたのではないですか？」

先生は、よくわからないという顔をして私を見た。

「確かに獲得形質が遺伝しない、ということがわかって、ラマルクの理論はダーウインにとつてかわられました。獲得形質というのは、首を長くする努力によって長くなった首というような、ある個体が一生の間に獲得した形質のことです」森下先生はそんなことはわかっているという顔をするので、私はさらに続けた。

「でも、そのダーウインの進化論にしたって、『首が長いことは役に立つ、だからその形質が進化して今のキリンができあがったんだろう』というように、機能にもとづいてあるものの存在理由を説明する、という考え方はラマルクとおんなじなんです」

「ではダーウインの理論はラマルクの理論とどう違うのでしょうか？」先生はたずねた。

「ダーウインの進化論は、ラマルクと同じ機能主義的な考え方を用いつつ、突然変異と自然淘汰という考えを使って、個人の一生の中での変化とは無関係に種の進化を説明することに成功します。」

さっきのキリンの例で言うと、首の短い古いタイプのキリンの群れの中に、もしたまたま他のキリンよりも生まれつき首が長い個体がいると、

彼らは高い木の葉っぱを食べることができるので、首の短い他のキリンよりも生き残りやすいと考えられます。そういう首長タイプのキリンが自分に似た子どもをより多く残して、種の中で首長キリンの割合が増えていった結果、全体的にキリンの首が長くなったという説明になります」

森下先生は納得、という顔をしてこういった。「なるほど。ラマルクやダーウインが機能主義的だということはわかりました。それが一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて長い間影響力を持った考え方だということも、まあその通りでしょうね。」

社会学や人類学でも、同じ頃スペンサーやデュルケームの考え方から機能主義の理論として発展して、社会のさまざまな規則や習慣は役に立つからこそ発達したという考え方が主流になっていっています」

そこで先生は言葉を切った。「それで何、ホイジンガはその機能主義的な説明がどう問題だと言っているのでしょうか？」

「あ、いえ、機能主義的な説明がいつもだめだと言っているわけでもありません。ただ遊びに関しては、それが適切な説明にならないと批判しています」

「遊びにおいて、機能による説明がうまくいかないのはどうしてなんだろう」

1・2 遊びと自由

「一言で言うと、遊びはその定義からして自由であるはずの活動だからです。遊びは、遊びのためだけに遊ばれる。何か別のことのための手段として行われるようなものは、それはもう遊びではない、とホイジンガは考えています。たとえば仕事としてサッカーをプレイするサッカー選手は、プレイしているとはいっても、ホイジンガの定義的には遊んでい

るとはいえないということです」

「自由な活動を人間的な活動として持ち上げるといってホイジンガの発想は、避ければおそらくカントからきているんでしょね。さらに大本を避けばギリシャ哲学からかな」先生は言う。「ハーバマスとかホイジンガとか、ドイツ人は何かとカントをひいて、社会現象を人の自由意志でもって説明したがるんですよ。長嶋さん、そもそも人は自由だと思いますか？」

これが反語的な意味での質問であることは私にもすぐにわかった。

「まず第一にホイジンガはドイツ人ではありません。第二に、直接カントの著書を読んだことはありませんが、遊びが自由な活動だというのはその通りだと思います」

「遊びが自由であるのはいいとしても、機能による説明ができないというのは別の問題だと思いますよ。機能による説明ができないから自由で、人はそういう自由意志を持った存在だから素晴らしいというのは、やっぱりカント的な発想だと思います。でも、うまく説明できないからそこに自由があるなんていうのは馬鹿げたことだと思いますね」先生はそういうと狡猾で挑戦的な目つきで私を眺めた。

「カントは、人に対してその行為の責任を求めることができるのは、人が因果関係の連鎖の外にいて、人が完全な自由意志によって、その行動を決めることができるからだ。と考えました。たとえば誰かが人を殺す。その人が誰かに操られて人を殺したのだとしたら、殺人の責任はその人にあるでしょうか」

「その人がまったく抵抗できない状況にあつたら、ないと思います。逆にその人を操った人に責任があることになるはずですよ」

「そうですね。カントもそう考えた。でもものごとには因果関係があ

る。たとえば、このテーブルの上でこうしてペンをころがしていくと、ペンは端に行くかと落ちる。これは因果関係の連鎖の一部として説明できます。落ちたことはペン自体の責任ではない。高いところにあるものが、こうしたテーブルのような支えを失えば、自然と重力によって落ちていく。そういうものです。では人間はどうか。殺人をするような人は、もともと暴力的な性格だったともいえます。あるいはそういう性格でなくとも、その人と同じような状況に追い込まれたら人は相手を殺したくなる、そういうものかもしれない。たとえば、自分のせいではないのに莫大な借金がある人から負わせられた。でも、その相手を殺せば、その借金はなかったことになる。しかもあなたは、その人を殺しても決して自分が犯人とはばれないようなトリックを思いついてしまう。そんな状況だったら、多くの人が殺人を判断するかもしれません」

そこで先生は立ち上がり夕闇のせまる窓の外を見た。誰か殺したい人でもいるのだろうか。

「うーん、どうでしょう。でもそうだとしたら、その場合、その人には責任はないことになるんですか？」

「カントは、そうした自分自身の傾向性なり、まわりの状況なりに関わらず、人は自由に考え、行動することができると考えた。そうした自然の因果関係の連鎖の外に、人間の自由意志はあると考えたんだ。でもそれは間違っていると思う」

そのまま窓の方を見ながら先生は答えた。

「えっどうしてですか？ カントの話は筋が通っているように思えますが？」

そう言つて先生は立ったままこちらを見下ろした。

「例えばなんでもいいけど、今日、僕はあなたとこうしてゼミで、ホイ

ジンガの『ホモ・ルーデンス』について語っている。これは、さまざまな因果関係の外で、私が自由意志でしていることでしょうか」

「たしかにそういうことになる様々な要因は、先生の自由意志とは別のところですので決まっていた部分もあるかもしれませんが、それでも、先生は自由意志でこのゼミのために別の本を選ぶことだつてできたはずです」

「でも私は『ホモ・ルーデンス』をテキストに選んだし、状況からすれば、まあありうる選択だつたと思う。」

と言って、先生は再び席につき本を手にとった。

「つまり、そうした状況が私をこういう選択に導いたのだと考えられる。自由意志ということはあとづけでしかないのかもしれない」

「でも、たとえば私は今日のこのゼミのために、こんなレジュメを準備せずに来ることができました。実際、他の学生だつたらやらなかった人もいたかもしれません。でも、私はそうすべきだと思つたから、自由意志でそうしたといえませんか？」

「それだつて、長嶋さんが単にそういう人だつたからで説明できるでしょう。そして長嶋さんがそういう人になつたのは、あなたが決めてうなつたわけではありませんよね。あることが自由意志によるという説明は、単にその自由意志と言われるものそれ自体がどのように発生したか説明することを放棄しているだけにすぎないのではないかな」

そう言つて、先生は椅子の背にもたれかかった。

「でもそれでは、遊びが自由な活動だ、というのはどうなるんでしょう。人はその活動がつまらなかつたら遊ばない、というのは確かにその通りですよ。あるいは逆に言うと、面白いかどうかということだけでそれをするかどうか決められるのが遊びですよ。このことから遊びが自由

だ、ということにはならないでしょうか」

「誤解があるようですが、私は遊びが自由な活動ではないとは言つていませんよ。人の行為には、単なる因果関係の連続として捉えられるような物理的な世界とは別の次元があつて、そこにおいて、人は自由意志で自分の行為を決定しているはずだ、というカントのテーゼに従うような意味での自由とはいえないと言っているだけです」

煙に巻くような先生の言葉に少々うろたえつつも、私は答えた。

「言っていることがよくわかりません。それでは遊びは自由だが、自由意志にはよらないということですか」

「ホイジンガがそこでのようなつもりで自由と言っているかはとりあえずおいておくとして、面白いから遊ぶ、だから遊びは自由だ、というロジックだけを取り出して、自由の意味を考えてみましょう。ここでいう自由というのは、ある活動をするかどうかに関し、その活動が手段としてどう役に立つのかということが決定的な影響を与えない、という意味ですよ。」

その人が何を面白いと思うかどうかは、ある程度あらかじめ決まっているわけで、その意志決定がなされた原因をそれ以上遡ることができないというわけではないでしょう。だからそれ以上遡ることのできない第一原因とは言えないけれど、でもその活動が自由であるということは別に間違っていない。人は確かに面白くなければ遊ばないでしょう。

それはたとえば火事の自動消火システムが、煙や温度などのさまざまなセンサーから総合的に火事が発生したと判断したとき、消火のためのスプリンクラーが作動する、ということと同じではないですか」

先生は挑発的な調子でそう言うと、半腰の姿勢になって、尻ポケットに入っているタバコの箱をとりだした。しかし不審そうにそれを眺める

私の顔をみて、「あー、今年から研究室内も禁煙になったんでしたっけ」と言った。

「私はこの大学のことはよく知りませんが、きつとそうなんじゃありませんか。建物の外の渡り廊下に喫煙コーナーもありましたし」（だいたいタバコを吸うときには、相手の許可をとるものでしょう、と心の中で付け加える）。

「じゃあしょうがないな」と先生は言つて、戸棚からコーヒーカップを二つ取り出し、コーヒーメーカーにできあがつていた真っ黒いコーヒーを注いだ。湯気が立ち、香りがあたりにひろがる。

「あなたもいかがですか」と私に差し出してくれた。私はどちらかといえばコーヒーよりも紅茶派だし、コーヒーを飲むときにはミルクたっぷりの派なのだが、断るのも面倒なので、私もそのままいただくことにする。種類とかはよくわからないが、とりあえず渋みのない飲みやすいコーヒーであることは私にもわかった。

先生はコーヒーをひとくち口にすると、カップをテーブルに置き、椅子の背にふんぞりかえるようにもたれかかつて、天井を眺めていた。私も入れてもらったコーヒーを飲みながら、それからしばらく二人で黙り込んでいた。

——なんだかおかしい気がする。

人が考えることと、自動消火のシステムが同じであるわけがない。スプリンクラーに自己の意志があるだろうか。あるわけがない。スプリンクラーが考えるだろうか？ 考えない。確かに「総合的な判断」みたいなものはあるかもしれない。熱センサーと煙センサーとその他なんやかやのセンサーからの情報を総合的に処理して、火事だと判断したり、単なるポットの湯沸し器から水蒸気が出ているだけだと判断したり、いろいろ

ろするのだろうか。でもそれらが「考えている」というのは違うはずだ。機械は機械にすぎない。人がプログラムしたとおりに、センサーからの情報を処理して、機械的に反応するにすぎない。

「なにかおかしいと思います」と私は思ったままを口にした。

「どうおかしいんですか？」

「人は自ら考えるけれど、自動消火システムは、単に人が作ったとおりに反応するにすぎません。自動消火システムに自由はないはずですよ」と私はいった。

「では、人には自動消火システムとは違った自由があるんですか？」

「人は自由に考えて行動します。そりゃあ、考えずに行動することもよくありますが、考えて行動するときもあります。そのとき、人は自由に考えています」そうですよね、という目つきで私は先生を見た。

「私だって、人が自由に考えていると思いますよ。でもその自由というのは、カントが言う自由とは違う。ただそれだけです」

「でもそれは両方とも自由なんですか」私はひどく混乱しはじめていた。

「両方とも、それが自由だと考えていますね」

「それって、ぜんぜん意味わかりません！」私は思わず大きな声を出していた。

「ちよつと、ちよつと」と私をなだめるようなふりをしながらも、先生はなんだかにやにやしている。

この人は学生を追い詰めることがうれしんだ、なんだかそんな気がした。すごく頭にくるけれど、これ以上話をしてもわかってもらえないかもしれない。どうしよう……。

「来週はどうしたらいいんですか」と、私は時計を見ながら言った。ちよつと五コマ目が終わる時間になっている。私はわざと音をたてながら、

持ってきた本や、まるで使わなかったレジメなどをかばんにしまっ
て、のんびりとコーヒを最後まで飲み乾してみせた。私をわざとい
たださせようとしているんだと思った。(その手には乗りません、おあい
にくさま！)

「いちおう、この授業の単位が必要なんです」と淡々と告げ、私は研究
室を後にした。後ろから先生の声があった。

「それでは、そちらがまだやる気ならまたこの時間に」

*

「……といううなわけよ」と私はその晩、さっそくゆかりに電話で最
初のゼミの顛末を手短に話した。「テキストのタイトルを説明しただけ
で、もういきなりつつこまれちゃうって、ちよつとありえないと思わな
い？」

「やっぱりねえ……。それが森下だつてことだよ」

「レジメつくつてきてくださいって言っておきながら、そこからレジメ
まったく無視でぜんぜん違う話になっちゃうし、ちよつと考えられない
感じ」と私は愚痴モードに入っていく。

「やめておいたほうが正解だつたでしょう？」思い通りの展開になつて、
ちよつと得意げにも聞こえなくもないが、ゆかりがちやんと心配してく
れている気配は電話でも伝わってくる。

「うん、確かにそうだったかもしれない。えー、でもどうしようかなあ
……」と私はすっかり弱気になった。

「途中から指導教官変わった院生もこれまでにいるらしいよ」

「そっかー。でも、第一印象は、悪くなかつたんだよね」と私は言う。

「遥の第一印象なんて、全然あてになんかつたじゃない！」

「そういえばそんなこともあつたねえ」

うん、そうだった。中二の春だ。転校生の山田君。みんなは「なんか
きもい」とか言つてたけど、私だけ、その暗さが妙に新鮮で、つい親し
げに話しかけたりして、例によつてゆかりにも止められたのに、最後
には結構シヨクな展開になつてしまつたのだつた。彼は動物好きだつて
言うから、放課後一緒に校内に住みついてた猫たちに餌をやつたりし
てたら、ある時から急に姿を消してしまい、どうしたんだろうねえつて
言つてたら、後から、彼自身が毒をやつたことが判明したのだ。一緒に
いた私も共犯者だと疑われて、クラスでずいぶん面倒なことになつた。

「うん、でももうちよつとがんばつてみることにする」と私は言う。

「指導教官変えるんなら早いほうがいいよ」とゆかり。

「まあねえ、それにしても、こちらも第一回で投げ出しちゃうなんて、
あんまりかと思つうから」

「まあ、確かにそれはそうかも」とゆかりは言った。

「じゃあ、また明日学校でね」

「おやすみー」

*

電話を切つてから私は、パジャマに着替え、歯を磨きながら、もう一
度スプリングラーの自由について考えていた。

——先生は私を挑発するつもりできつと自動消火システムと人間が同じ
だつて言つたんだ。

私は鏡を見ながら、自分に語りかけた。私を怒らせたくて、比較的単
純な仕組みの機械をわざわざ例に挙げて、人間と比較したのだろう。私

は馬鹿みたいにその挑発に簡単に乗ったのだ。

——しかし、もつと複雑な機械、たとえば鉄腕アトムみたいなロボットだったらどうだろう。

そう、先生がもし鉄腕アトムみたいなロボットを例に挙げていたら、私もそうかもしれないと思っただろうと思う。鉄腕アトムは、自分で考えている。でも、アトムだって、天馬博士が作ったロボットなのだ。天馬博士が1から100まで予想するような動きや考えをするわけではないにしても、考え方の基本はプログラムとしてアトムの頭脳に組み込んであって、経験をもとに考えが深まっていくようにきつとできているのだろう。

私は口をすすぎ、タオルで顔を拭いて、ベッドに腰を下ろした。

——アトムが普通のコンピューターと違うのは、私たちと同じ言語で考えることだ。そして自分で考えていることを知っていることだ。

そう、そのとおり。だから私はアトムなら、人間と同じように「自由意志」を持っていると言う事ができる。しかし、アトムがどういうふうに見えるのか、その考え方には基本的な原理があつて、それを天馬博士は説明することができるだろう。なんといつたつて、アトムを作った本人なんだから。

私は天井のライトを消し、ベッドのライトをつける。

——人の場合には、それはできないのか？ いや、そんなことはない。基本的な原理、というなら、心理学によって、大体のところは説明できるはずだ。一人一人の考え方が違うとは言つても、性格によってある程度予想もできるだろう。文化の違いもあるかもしれないけれど、そういうのだって、説明に加えればいい。

——でも説明できないところもきつと残るだろう。

うん、確かに。でも説明できないところが、人の自由であるわけではない。たとえば、私は今、自分が軽率だつたと思つている。すぐ感情的になつて怒るけれども、ひきずらない。自分が正しくないかもしれないから、ちゃんと否を認めて、反省する。

私は何だか、うれしくなつてきた。ベッドに潜り込んで、明かりを消す。

——そうだ。私の私らしいところは、私らしいだけに、予測しやすしい、説明可能だ。どうしてそういうことをするのか。それは私の性格がそういう性格だからだ。なのにそれはたしかに私の意志である。そして自分が自分の性格どおりのことをしているときに、私は自由を感じている。感じてはいるだけではない。私は自由なのだ。

——先生はこういうことを言っているのだろうか？

そんなことを考えているうちに、私は眠りに落ちていた。

1・3 遊びと自由(続)

翌週の月曜日、研究室の扉を開けると、今日はなんだか少しだけ部屋が片付いていた。

「ちゃんと来ましたね」と先生は言った。余裕のある感じだ。今日ははじめからコーヒーが出ている。

「この部屋片付けられたんですね」

「学生が入つたから、学生向けの本を調査室のほうに移しておいた」

「あちらの本は貸し出ししているんですか？」

「持つていくときには私に言つて、貸出ノートに書けばいい」

「わかりました」と言つて、私はコーヒーに口をつけた。「おいしいです」

「ありがとう」

二人で黙ってコーヒーを飲む。

次第に沈黙が重くなり、私から口火を切って話し始めた。

「前はなんか、急に大声を出してしまっただけじゃないよ」と先生は言う。まだこちらの様子を見ている感じだ。

「いえ、怒ったわけではなくて」とあわてて私は言ったが、実際怒っていたと思う。あれだけ挑発されちゃねえ……。「あれからスプリンクラーについて、考えてみました。それからロボットについて。それで何となく、先生が言われていることが少しわかってきた気がします。ひとつおたずねしたいんですが」

「どうぞ」と先生。

「そのスプリンクラーの自動消火システムは、先生の言うような意味では自由なんですか？」

「もちろん自動消火システムは人でも生物でさえありませんから、ふう自由だとかいうことは言わないでしょう」と先生は言った。「ですが、人が何かを判断し行動するということは、自動消火システムが火事かどうかを判断してスプリンクラーを作動させるということと、本質的に変わらないはずですよ」

「私は、あの後、アトムのようなロボットについて考えてみました」

「アトムね。いいでしょう。それでどうなりましたか？」

「アトムは人と同じように考えます。そこに自由意志、というものがあるように思います。でもアトムはロボットで、その思考は機械的な過程で、誰かがプログラミングをしています。アトムは想像上の存在ですが、そうしたプログラムによって考えるアトムが、『自分は自由に考えている』と思うということは可能であるように思います。ということは、自

由に考えるということと、それが機械的な過程である、ということは関係ないんだ、ということになるのだと思います」

「そうですね。アトムは考えるし、自分が考えていることも知っている。そこがスプリンクラーの自動消火装置との違いだ。でも人だって、しゃべっているときには、ただしゃべっている。そりゃあ自分がしゃべっている内容を聞いてはいるし、しゃべりながら考えることもあるかもしれないけれど、しばしば人も考えずにただしゃべる。でもそういうときだって、人は自由ですよ」

「はい、そうだと思います」と私は答えた。

「ということは、人が自由であるために、振り返ることは必ずしも必要としないということだと思います。それなら、自動消火システムと人は、そのレベルでは何も変わらないということになるでしょう。自動消火システムの動作について、物理的な因果関係によって端から端まで説明できるように、人の中で起こっていることも、化学的な反応のまとまりだと言えます。しかしその化学反応は、一般的な世界の多種多様な物理学的な作用・反作用とは異なり、外界の様々な状態を抽象化して単一のシステムで表現するといった情報処理過程を担っていると考えることができる」

「物理学的な作用、反作用ってどういうことですか」と私はたずねた。

「理系だったら、そのくらいわかるでしょう？」

「そうですね、生物系なんて物理はちよつと……」

「ニュートン力学的な法則のイメージって、ビリヤードみたいなものによく表現されますが、動いている玉が、別の玉にあたると、動いていた玉はとまり、別の玉が動き出す。別の玉を動かす力が作用で、動いていた玉を止める力が反作用です」

「ええ」

「でもここではそういうことがいいんじゃないやなくて、ピリヤードでブレイクするとき、玉が連鎖反応でぶつかり、散っていく。その途中で作用反作用が働くわけだけれど、大事なものは、その過程において、何かを何かを表しているわけではないということですよ」

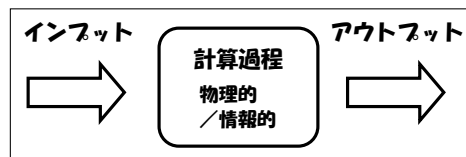
「はい、それはわかると思います」

「一方、自動消火システムの場合、センサーからの情報は『それが火事かどうか』という判断に集約され、その結果に従ってスプリンクラーが作動する。それは、人が『その活動は面白いかどうか』ということを判断して、遊ぶか遊ばないか決めるということと特に変わらない、そういうことです」

「でも、自動消火システムの中で起こっていることは、ある意味玉が連鎖反応で次々にぶつかりながら動いていくことと変わりませんよね。温度変化を感知するセンサーが働くと電流が流れ、煙を感知するセンサーが働くと電流が流れる。その電流により、警報や消火システムが作動をはじめ。それは、ある意味、ピリヤードで玉が連鎖反応的にぶつかっていくことと変わらないのですか？」

「確かにその通りです。単純な回路なら、決定はまさに機械的になされる。人間の自由と比較できるような自由なんてものは、そこには何もありません。もつとも単純な仕組みを例に挙げれば、ヒューズみたいなものが挙げられるでしょう。回路を流れる電流が一定量を超えると、ヒューズは発熱して溶けてしまい、回路が切れて、電流が流れなくなる。単純な仕組みのスプリンクラーも、温度が高くなると、水の栓が抜けるか物理的に破壊されるかして、それでもととかかっていた水圧によって、放水がはじまる、というような仕組みだったりします。ここには思考的

なものは見られません。でも、より複雑な「システム」と言えるようなものになると少し話が変わってきます。熱センサーは、温度によって流れる電流の量が変わるような仕組みですが、あちこちに設置されたセンサーにより、複数個所の温度やその変化がコンピュータによってモニターされ、火災がどこで起こっても、その場所をピンポイントで捉え、消火する。そうなると、そこには情報に対する計算と判断というべきものができあがります。つまりこういう感じ」と言って立ち上がり、ホワイトボードに図を描いた。



「インプットは物理的な温度変化ですし、アウトプットは、消火システムの作動、すなわち水を撒いたりすることです。その途中の計算過程も、物理的には、電流の ON・OFFといった過程の連鎖ですから、ピリヤードの球の移動のようなものといえなくもない。しかし、その過程は、たとえば USBメモリみたいなまったく違う物理的実体にそれを移しても、同じものが再現できる。それは物理的な実体であると同時に、情報の処理過程とも言えるようになる」

「情報の処理過程としてみることができるといふことと自由とはどう関係するのでしょうか？」

「行動を決定する上で、情報処理の仕方がどのような仕組みになっているか、ということが大きな役割を果たすようになる。その内部的な過程が存在する、ということが人が自由でありうるための必要条件になっているということですよ」

「それは、私たちが考えるということと同じでしょうか？」

「もし僕らが、つながない馬を自由だといい、かつ馬は意識的に

思考しているわけではないだろうと考えるなら、必ずしも意識的に考えていることが自由の条件ということではなさそうですね」

「ではどういうことなのでしょう？」

「やりたいことができる、というのが自由だということなら、何をやりたのかというような意志があり、それができれば自由ですよ」

「はい。でも消火システムに意志があるのでしょうか？」

「では、アトムには意志がありますか？」

「あると思います」

「アトムと自動消火システムの違いは何でしょう？」

「アトムは話します」

「馬は話しますか？」

「馬は話しませんよねえ。でも馬にも意志はありそうですね」

「馬は何か考えていますか？」

「わかりません。考えているかもしれないし、そうではないかもしれない」

「ということは、もし考えていないとしても、意志はありそうですねということですよ」

「はい」

「たとえば、速く走りたいというような欲求があるということは考えられる」

「そうですね」

「アトムの場合は？」

「人間を危険から守る、とかでしょうか？」

「だったら、自動消火システムだって、もし火事が発生したらその火事を速く消火し、火事が発生していなかったら、何もしない、という『欲

求』が想定できそうですね」

「でも機械ですよ？」

「アトムは機械ではないんですか？」

「うーん……」

「結局、自由という概念をどう定義したらいいのか、という問題にゆきあたります。またそれは単なる人が行う定義の問題なのか、それとも、現実世界を動かしている原理そのものなのかという問題です。自由という概念は、機械というものが未発達なときにできてきた。だからアトムみたいなロボットも、自動消火システムのような装置も想定していません。でも現在はそうしたものはかなり現実的になってきている。アトムのようなロボットはまだ現実には発明されてはいないけれど、あのような自分で考えて行動するようなロボットはそのうちできるだろうということはもうだいたい現実的になっています。そうすると、自由という概念そのものが変わっていくことになると思います」

「そこまで話して、先生は満足げになっています。私も、先生が言いたいことがなんとなくわかってきた気がした。」

「つまり純粋に論理的に考えると、自動消火システムにも、ある種の自由があると、そういうことですね」

「そういうことですね。そして、それは遊びにおける自由と同じものである」

「何かちよつとつかめてきたような気がします。でも……」と私は続けた。「ということは、人が面白いと判断して遊んだ結果、それが、その人にとって、何らかの意味で役に立ってしまったとしても、それは自由・不自由とは関係ないということになりますよね」

「それは、そうですね」

「そして、人の生命システムは、面白いと感じたとき、その感情に従って行動することで、一層生き延びやすくなったり、子孫を残しやすくなったりするようにできているのではないか、ということも想定できるわけですよね」

「たしかに生物学者なら、より多く子孫を残すという淘汰圧の中で、人がそういった意味で適切な感情を持つように進化してきたのではないかと、という仮説を立てるのでしょね」うん、そうだろう、と先生は独りごちた。

「だとすれば、面白いと感じること自体が、そういう生物学的な機能の一つだとも考えられるということですか」私はたずねた。

「まさに自動消火システムが、火事に対してもっとも適切に反応し、また火事でもないのに誤作動することのないよう、日々、改善されていることと一緒にですね。言うなれば自動消火システムの自由とは、そうした可能性とともにあるのだということなかもしれません。生物学者のいうとおり、おそらく人だって、本質的にはそうした自動消火システムと変わらないということですよ」

——なるほど、わかった気がするぞ。

私は次のようにまとめてみた。「つまり、人には、カント的な意味での自由意志はなく、生物学的な機能という因果関係の束縛の中にありながら、しかし同時に、先生の言うような意味での自由を享受している、ということですね。言い換えれば、カントとホイジンガの自由概念は全く異なっていると」

「はじめからそう言ってますよ」と先生はひょうひょうと答える。

「でも、私のノートには、

自由⇨人間的 カント⇩ホイジンガ

と書いてあります。先生がそうおっしゃったのだと思います。ホイジンガの自由概念はカントからきたということではありませんでしたか？」

先生はまさかこんな反論をされるとは思っていなかっただろう。ちよつとあつけにとられた様子を見せたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「ごめんなさい、確かにそうですね。あなたがあっています。ホイジンガは、遊びが自由だということは、それは説明を超えるようなことだと信じていたのだと思います。そういう意味でやはりカントと似たような考え方をしていたのでしょう。ホイジンガは遊びの自由な性格を持って、その合理的な説明を否定し、不可能だとしていた。だからホイジンガ自身は、遊びの面白さを、ルールに従うこととか、虚構の世界を作り上げることとかで、事実上説明しようとしているのだけれど、しかし本人は、自分が遊びの面白さを分析し、説明しているのだということを拒否していました」

「それはカント的な自由の考え方に捉われていたからだとということですね」

「ええ、そうだと思います。しかし私は、遊びの本質は面白さであり、それは説明可能だと思います。しかも、生物学的な説明と両立するようなものだと思います。そのうち、あなたにも読んでもらいますが、有名なアメリカの社会学者のゴフマンは、遊びの面白さを社会的に説明しています。その考え方は、ホイジンガの考え方を発展させたものでした。また、同じアメリカのチクセントミハイという心理学者も、今度心理学のほうから遊びの面白さを説明しようとしている。その考えは

ゴフマンとはまったく違うけれど、でも、やはりホイジンガの発展型的なところがあるんだな、ということは今回ホイジンガの本を読んでみて感じました」

「でも、ホイジンガは遊びの面白さは説明できないものだと考えていた」
 「そうですね、そこです。問題はホイジンガの自由観にあったんです。その自由観を、ヒュームらイギリスの哲学者の考え方で置き換えてやると、問題は解消するんです」

「それが先週から先生が説明しようとなさっていた、自動消火システム的な自由観なんですね」

「そうですね。カントや、彼の影響を受けた人たちは、個人は、ただその本性としての自然に任せて生きることも可能なんだけれど、それでは人らしい生き方とはいえない。その自然としての本性を、理性でしっかり統率してこそ人間だ、というように考えました」

「そういうながら、先生はホワイトボードに

理性（＝人間性） ↑ ↓ 自然（＝動物性）

と書いた。

「そのような意味においては、カントもホイジンガも同じように自由を理解していることになると思います。それに対して、イギリスの哲学者、ロックやヒューム、J.S.ミルといった人たちは、人の意志と本性とはつながっていると考え、自然と意志とを対立したものと捉えません。本性も自然も英語ではnatureだから、おなじもの。彼らにとって、人間は自然の中の存在なんです」

自然 U 人間の本性（理性・感情）

「このUみたいなのは、含むという意味の数学記号ね。人間は自然の対立物ではなく、自然の一部であるということです。ヒュームは、人が自由だというとき、それは、その人がやりたいことができるかという問題を指しているはずだ、それを僕らは自由と呼んでいるでしょう、と言います。後の語用論、つまり言葉の意味はその使い方にある、という考え方がすでにそこに出てきてるんですね。何をしたいかどうか、それ自体に自由とかそういうものではなくて、それはその人の本性によって考えると考えるんです。僕らは因果関係という見方でものを捉え、そういう見方をする限り、人自身だってその因果関係の中にいると以外考えようがないというんだ。それが人が自然の中の存在だってことです。意志を持つという時点で不自由だとかいったことはありえない、という意味において人は生まれつき『自由』な存在で」

ここで先生は、カギカッコを身振りで示し、それがカッコつきの「いわゆる自由」という意味であることを示した。

「そうした個人がその『自由』を失うのは他者に束縛されるときだということになります。政治的な意味での自由主義と連続するような自由観ですね」

先生はふたたびコーヒーカップに口をつけたが、もう中身はほとんど入っていないかったようで、立ち上がりコーヒーサーバーからもう一杯注ぎ足した。だいぶ煮詰まって、コーヒーは真っ黒になり、見るからに苦そうだ。一口飲んで、先生は微妙な顔をした。

「それが、先生の先ほど説明してくださいました自由概念ということですね」
 私は、先生がホワイトボードに描いた図をもう一度じっくりと眺めた。

「はい、そのつもりです。長嶋さんが生物学をやってきたなら、概ね生物学の発想はイギリス的な要素還元論がメインストリームになっている

からわかりやすいだろうと思います」

「ヨウソカンゲン論?」……聞いたことのない言葉だ。

「いろいろな現象を、それ以上分解できないような小さな要素にまで分解し、その組み合わせで説明しようという考え方です。デモクリトスの原子論がその起源と言われていますね。僕らが中学、高校で勉強する元素とか酸素みたいな原子の結びつきによる化学反応の説明も、デモクリトスの考え方に基づいて、物理現象を説明しようという試みです。現代では原子はさらにクォークと呼ばれる素粒子にまで分解されるにいたりましたが、その原子論的な考え方自体は今も変わりません」

「それと生物学がどう関係するんですか? ひとくちに生物学といっても、さまざまなレベルと領域がありますが」

「まずは分子生物学みたいに、生物の中の生命過程をおもに化学的な反応で説明しようとするような領域がありますよね。これは物理学が対象にするような素粒子よりはずっと大きなレベルの現象を扱っていますね、基本的な考え方には共通しているでしょう」

それを聞いて私は生物学と物理学の違いを考えてみた。何か違いがあるような気がする。「そうでしょうか。もちろん共通する点もありますが、情報という考え方や機能という考え方があつては少し違う気がしますが。分子レベルで化学反応を見ているとはいえ、やっぱり生物をみるわけですから、遺伝情報とか、タンパク質を合成するための情報とか、そういう見方があるし、また生命を維持していく上での機能という考え方はあります。それはもつと大きな循環器系、消化器系みたいなレベルの機能を考える考え方と同じです」

そういう私の答えを聞いて、先生はちよつと驚いたみたいだ。私はちよつと得意になった。

「情報と機能ねえ……。うん、たしかにそれらは単純に要素還元論的とも言いがたいかなあ。生物学では遺伝子を扱うから要素還元論的だって、単純に考えてただけで、そうとは言えなさそうですね。うーむ」

先生は難しい顔をして、しばらく考え込むと、こう続けた。

「とりあえず生物学は置いておくとして、社会科学の中で考えると、経済学には要素還元論的な思考があります。マクロな経済現象を、個人の行為に還元する。経済現象を分解していくと、最終的に一人一人の経済活動にまでいきつき、それ以上分解できないところまでいく。その個人の経済活動は、貨幣で測られるような満足を最大化しようという原則でモデル化でき、そうした個々人の行為の集積で巨大な社会の全体的な経済もみな説明が可能になる、という発想です。一方、社会学という学問はどちらかというと、この経済学的な発想に対抗し、フランスやドイツの思想を軸に展開してきたものだから、こういう要素還元論的な考え方は、社会学の中だと傍流という感じは否めませんね。もつとも社会学が発展して後に、経済学の理論を輸入して社会学でも応用することはありますが。その代表例がゲーム理論かな。ゲーム理論については聞いたことはありますか?」

「はい、前の大学でもちよつとやりました。ちゃんと理解できているかは怪しいんですが」

「では、少しより道になるけれど、来週はゲーム理論について説明してもらおうか。前の大学のときのノートか、そのあたりについて説明した本は持っていますか?」

「ノートがあると思います」

「じゃあ、来週はそれを見て説明してもらいます。では、今日はこのくらいで」

*

「ふーん、遥はそれで納得しちゃったんだあ……」ゆかりはなんだか面白くないさそうさ。

「あの先生ね、確かにいちいち学生に挑んでくるようなところはあるけど、それにあえて乗って考えてみると、今まで見えなかったことが見えてきたとかね。なんかこういう勉強を私はしたかったのかなあと思えてきてさ」

「そんなの、今だけかもよ？ 今までの先生とやりあって、ついでにけた学生なんていないんだから」

「でも、とりあえず森下先生でよかったと思うよ、今のところ」

「そうねえ。まあ今だけにしても、あの噂に聞くするどいつつこみに遥は負けなかったんだったら、けっこう合ってるのかもね」

「うん、わたし、わりとファイターだからさ、やられたら三倍返しみたいな？」

「遥は三倍じゃきかないんじゃない？ この前も、いかにもやばそうな男に注意とかしてたでしょう？」

「ああ、あれね。混雑した電車ですっごい足開いて、寝たふりしてるからさ。前におばあちゃん立ってるのに」

「あの人の場合はほんとに寝てたみたいだったね。恐縮してすぐ立ち上がっちゃってさ、ぺこぺこ謝るから、私まで恥ずかしかったよ」

うんそうだった。あれは確かに私のはやとちりで悪いことした。髪をとがらせて、革ジャンにブーツといういかにもわかりやすいパンクな格好をしたお兄ちゃん、目をつぶって音楽をきいてるふりしてるから、周りが恐れて遠巻きにしていた。でも私がちょっと注意したら、本当に寝てたらしくて、ずいぶんあわててた。みんななんだかばつが悪くて、お

ばあちゃんは座ってくれたものの居心地悪そうにしてるし、私たちも次の駅で用もないのにいったん降りるふりをして、別の車両に移ったのだった。

「まあそういうこともあるけど。でも正しいことはちゃんと言えば通るものよ」と私は言った。

今思えば、このときやはり私はかなり調子に乗っていたのだと思う。学問の面白さ、あるいは議論の面白さにとりつかれはじめていたのかもしれない。そして、正しさという武器の力の虜になろうとしていたのだろう。しかし、その面白さは、学問や議論の痛みや苦しみといつもセットであり、また正しさを追い求めることが、いかに人を傷つけるかということを、その頃の私は理解していなかった。そういう意味では、やはりゆかりの心配はもつともだったと言っても良いのかもしれない。しかしそれはまた後の話だ。このときは、ゆかりもこう言ってくれていた。

「そういうとこ、戦い好きの森下と同じ感じ。そりゃあ合うかもしれない。でも、あつちほんとにかくそんでもやっぱしプロなんだから、学生のあんたがガチでぶつかつてると、そのうちあんたのほうがつぶされるかもよ？」

「へい、へーい」と私。まったく手のつけようのない馬鹿ものだ。

「まったくもう、こつちはほんつとに心配してんだからね」

「了解ですよ。ゆかりねーさま」

「じゃあ、またね。何かあったら、おおごとになる前にちゃんとあたしに相談すんだよ」

「はあい、わかりました」

私は受話器をおくと、明日の授業の準備にとりかかった。

参考文献

- ホイジンガ
1938 = 1973 『ホモ・ルーデンス』 高橋英夫訳 中
公文庫
- ヒューム
1739 = 1980 人性論 土岐邦夫訳 『世界の名著』 32
ロック・ヒューム』中公バックス
- カント
1788 = 1979 『実践理性批判』波多野精一・宮本和吉・
篠田秀雄訳 岩波文庫